

仙台藩 歴代藩主の横顔 第1回

二代藩主 伊達忠宗

仙台市博物館 学芸普及室長 菅野 正道



仙台藩には江戸時代を通じて一三人の藩主がいましたが、初代藩主である伊達政宗を除いては、その人物像はあまり知られていないようです。しかし、政宗以降の藩主もそれぞれ個性的で、多くの事績を残しています。今月号から、仙台藩にはどのような藩主がいたのか、順を追って紹介していきます。

次男ながら跡継ぎに

最初に紹介するのは、伊達政宗の跡を継いで二代藩主となった忠宗です。忠宗は、政宗の正室愛姫の子として慶長四年（一五九九）



「里遠き〜」の和歌を記した伊達忠宗の書(仙台市博物館所蔵)

に大坂で誕生し、虎菊丸と名付けられました。虎菊丸には8歳年上の兄・秀宗がいました。秀宗は豊臣秀吉にかわいがられ、その名前も秀吉から「秀」の字をもらったもので、幼いながらも朝廷から官位を与えられていました。豊臣家の天下が続けば、おそらく秀宗が伊達家の後継ぎになったと思われる。

しかし、虎菊丸が生まれる前年に豊臣秀吉が没すると、豊臣政権は急速にゆらぎ、関ヶ原の戦いを経て徳川家康が天下を握ることにあります。そうすると前政権で厚遇されていた秀宗はいかにも具合が悪い。そこで政宗の後継者として選ばれたのが虎菊丸でした。秀宗は側室の子で、虎菊丸の母が正室・愛姫であったことも都合の良いことでした。政宗は徳川家康に要望し、その娘と虎菊丸との婚約を結び、また元服の際には二代將軍・徳川秀忠から「忠」の字を拝領して忠宗と名乗らせました。こうして忠宗は、次男ながら仙台藩二代藩主となることになったのです。

二代目いつく

今も昔も、創業者の跡を継ぐ二代目には苦労が絶えないものです。しかし忠宗は仙台藩二代藩主として、政宗が築いた仙台藩を育て上げた有能な藩主として成長しました。

忠宗が藩主の地位に就いたのは、寛永一三

年（一六三六）に政宗が七〇歳で亡くなった後のこと。すでに忠宗は三八歳になっていました。大藩の跡継ぎとして大名に準じる待遇を受けていたものの、中年になっても当主となれない焦燥感や不満はあったと思われる。忠宗はその間、じつと次に来るべきステージに向けての準備をしていたのでしよう。当主の地位に就いた忠宗は、矢継ぎ早に藩の新体制構築に力を注ぎます。まず重役人事体制を決定しますが、これは政宗の重臣と自分に近い人材のバランスを取った見事なものでした。さらに新しい体制の下で、さまざまな規約の整備や土地制度、租税制度の体系化などを推進し、政宗が築いた仙台藩の基盤をさらにしっかりとしたものにし、万治元年（一六五八）に六〇歳で没するまで、藩政の確立に重要な役割を果たしたのです。

「守成」という語で語られることの多い忠宗は、武術や馬術を好んだと言われますが、どうしても父親にくらべて地味な印象が強かったと言われます。政宗と異なり和歌も得意ではなかったと言われる忠宗ですが、面白い作を残しています。「里遠き 深山の菴（＝庵） 傾きて 月に問わるる 墨染めの袖」という和歌を言葉遊びで表現したものの、「里」の字を紙の右端に離して書いて「里遠き」、斜めに書いた「菴」の字で「菴傾きて」、「袖」の文字に墨汁を散らして「墨染めの袖」を表現するといったユーモアあふれるものです。政宗も折々に狂歌を詠んだことで知られていますが、そうした政宗のDNAはしっかりと忠宗にも受け継がれていたのです。

※本稿では仙台市博物館の学術研究機関たる立場から人名に敬称を付しておりません。

『仙台市史』のご案内

仙台市史 通史編 近世 I

政宗～忠宗の治世期をおもに解説。「仙台藩」の統治体制を確立させた二代藩主・忠宗の事績を知るには必読の一冊。

宮城県内主要書店にてお買い求めいただけます。
A5判 オールカラー 495ページ
本体価格 2,858円(税別)
販売元：(株)宮城県教科書供給所 電話022-235-7181



博物館休館のお知らせ

12月28日(木)～2018年3月30日(金)

館内設備改修工事のため、上記の期間は休館とさせていただきます。(ミュージアムショップ・レストラン含む)
ご不便をおかけしますが、ご了承くださいませ。

《休館中のお問合せ先》

電話:022-225-3074

(月～金 9:00～16:45)

FAX:022-225-2558

※平成30年度の展覧会予定などにつきましては、決まり次第博物館ホームページや各種広報物でお知らせします。

仙台市博物館 TEL:022-225-3074

仙台市博物館

検索